「私の小学生時代」（抜粋）　大学2年　森田　重晴

手師学尋常小学校隈川特別教授場と隈川での暮らしの思い出

大正11年４月１日、私は常呂村立手師学（現在の日吉）尋常小学校隈川（現在の吉野）特別教授場へ１年生として入学した。

その朝、母は私の入学を祝ってキビのお餅をついて祝ってくれた。その頃は、キビのお餅といっても正月か節句かお祭りぐらいしか食べられない尊いものであった。そして、母は「今日からお前は１年生だ。しっかり勉強して偉い人になるんだよ」と言って、嬉しそうに私の頭をなでて見送ってくれた。

絣（かすり）の着物に縞（しま）の袴に絣の羽織姿で学校へ急いだ。今のように服を着ている生徒は１人もいなかった。学校までの約２キロくらいの道のり、といっても現在のような道路ではない。兎の通る道のような小道しかない。幸いにその朝は凍（しば）れて白一色のカタ雪で、どこを走ってもぬからない。さそってくれた隣の上級生のお姉さまたちと、野を越え林をくぐり抜けて、ほとんど走り続けるようにして学校に着いた。

隈川特別教授場は、吉野小学校の前身で、新しい校舎といえば立派なように聞こえるが、まだ完成していなくて玄関もない30坪ほどの教室が１つと細長い廊下だけの学校であった。

新入生男女合わせて８名と上級生20名余りでの入学式が始まった。今でいえばＰＴＡ会、当時は保護者会といっていた、部落の父さん方が６名ほど出席していた。私は緊張した気持ちで一番前に立っていた。１人しかいない先生の式辞があり、その後、私の父が祝辞を述べた。きっと保護者会長だったのだろう。どんなことを話したのかは記憶にないが、今ある通り一遍の祝辞であったのだろう。けれど、私は父は偉いんだなあと誇りに思った。

こうして私の小学生としてのスタートが始まった。正面に大きな黒板があり、その左側に先生の机があって事務室はない。そのそばに薪ストーブがゴウゴウと音を立てて燃えていた。初めて見るストーブであった。こんな教室で読本、算術、書き方などの３教科が主で始まった。

１人の先生が６年生まで教えるので、実際に教えられる学年は６分の１しか教えてもらえない。しかしその反面、１年生でも上級生の方を教えているのを見たり聞いたりで、色々なことが勉強になったように思う。私はこうした小さな学校に６年の間、１日も休まず通った。

当時の吉野は、ほとんどが谷川の水を頼りに川辺に住宅があった。草屋根、草壁で奥の方に寝室が１間きり、台所は長く大きい囲炉裏のある広い部屋、今のようにストーブではなく、囲炉裏に大きな薪を積んだたき火の炉である。自在というものに鍋をかけてご飯やお汁を炊いたり、暖を取っていた。南側に小さな窓が１ヶ所あるだけで、明かりをとっていた。夜はカンテラという小さな石油ランプで明かりをとり、母がその明かりのそばで毎晩のように縫い物をしていた姿が今も眼に浮かんでくる。また、時計のある家も少なく、ほとんどの家では昼は太陽、夜は月や星の位置を見て時間を判断した。鶏の鳴き声で夜明けを知るという生活の知恵であった。

主食は麦飯で、イナキビを少し混ぜるか、お米を少々入れるのが常食であって、白い米のご飯は尊いものとして、１年に正月とお祭りか３・４回しか食べられなかった。その他

は風邪をひいたとか、おなかをこわしたりの病気の時だけ、母が白いお粥を作ってくれたのを嬉しく食べたものである。馬鈴薯も大きな鍋で毎日のように炊いた。今も忘れられないくらい本当に美味しかった。どこの家庭もこうした状態であったから、これが当たり前と思って私は成長していった。今のようにテレビやラジオなどは勿論なく、何の娯楽のない毎日、父母たちは3日遅れの新聞をとって、何よりの楽しみとしていたようである。

来る日も来る日も直径50センチから1メートルもある抜根が無数にある間を鍬で開墾して種子を蒔いていく。まず食用の麦、イナキビ、馬鈴薯などのようであった。換金作物としては薄荷（ハッカ）を作っていた。ハッカといっても今は面影もないが、当時、薬品として、また香料などに使われて、外国にすばらしい高値で輸出されていた北見特産の作物であった。後年、世界の70％が北見管内で生産されたハッカ。そのハッカは1度苗を植えたら10年でも20年でもそのまま。蒔き秋に1度耕しておくだけで収穫ができる香りの強い作物であった。このハッカについては色々な思い出話が数多くあるが、後に譲ることにする。このハッカによって、当時の農家はいかに潤ったか計り知れないものがあった。

さて、その頃の吉野は、どこでも馬、犬、鶏、猫を飼っていた。その理由は、馬が現在のトラクターであり、トラックであり、乗用車であった。畑を耕すのも物を運ぶのも、遠くへ買い物に行くのもすべて馬頼りであった。鶏は各家庭の栄養源であった。何もない当時としては卵、また肉は何よりの貴重なものであった。そして犬は、人や馬、鶏を熊や狐、その他の恐怖から守ってくれた。また猫は、食料や布団や衣類などを食い荒らすネズミから守る。こうした5者が共存してはじめて安心した生活ができたあの頃であった。

そうして私が5年生の4月、特別教授場が隈川尋常小学校として認可された。その年12月25日天皇陛下崩御。大正は終わり、新しく昭和元年、7日間で昭和2年となり、今の昭和が始まった。

この頃から時代の流れは急激に変わってくる。翌年の3月、私は卒業生を代表して先生に謝辞を読んで、無事小学校を卒業することができた。昭和3年3月21日である。（略）

常呂町高齢者教室『昭和62年度　オホーツク大学文集　トーコロ』掲載
（昭和63年3月発行）

■「吉野・登小閉校記念誌」から		
大正　８年	４月２４日	手師学尋常小学校所属隈川特別教授場設立認可
８年	５月８日	元笠原農事事務所、掘立草葺１２坪を校舎として開校、児童１８名
１０年	９月１１日	笠原柳一氏、校地として土地５反歩寄贈、新校舎建築着手
１１年	２月２７日	新校舎落成、木造平屋建て３２坪
	３月１０日	隈川特別教授場保護者会設立
１５年	５月　５日	玄関増築落成３坪
昭和　２年	４月　１日	隈川特別教授場が隈川尋常小学校に昇格